

宋一清身分法の研究

著者	津田 芳郎
号	186
発行年	2001
URL	http://hdl.handle.net/10097/14526

つ だ よし ろう
津 田 芳 郎

学 位 の 種 類 博 士 (文 学)
学 位 記 番 号 文 第 186 号
学位授与年月日 平成14年 3 月 7 日
学位授与の要件 学位規則第 4 条第 2 項該当

学 位 論 文 題 目 宋一清身分法の研究

論 文 審 査 委 員 (主査)

教 授 安 田 二 郎 教 授 熊 本 崇
教 授 中 嶋 隆 藏
教 授 三 浦 秀 一

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は筆者が東北大学大学院入学以来継続して行ってきた中国史の研究の中から、身分法に関する研究成果を一書にまとめたものである。

戦後のわが国の中国史研究は社会経済史を中心に推進されてきたが、近年それへの反省から政治史や法制史の研究に力点が移ってきている。筆者は、社会経済史研究の抱える課題は、残された史料の性格からして法制史と結合させてこそ有効に解決しようとの観点に立ち、1970年代半ばから宋代を中心に明清代に及ぶ身分法の研究を行ってきた。本論文の特徴は、時間軸として宋代から清代までを一貫して視野に収めた点、身分法の中国的特質を論じた点、身分法から見た中国社会の発展段階を提示した点にあらうかと思う。本書が扱う分野は従来部分的に他の課題との関連で論及されてきたにすぎず、それゆえ先述のように宋から清までを一貫して論じる必要があったのであり、また制度史研究に止まらず実態の研究を行う必要もあったのである。但し扱った範囲は良賤制に関する部分を除けば私的な社会関係の中に設定された法身分に限定されており、また身分意識や身分観についても些かの論及を行っているにすぎない。その意味で本論文は「身分法」の研究であって「身分」ないしは全面的な「身分制」の研究ではない。

顧みれば、中国の身分制に関する研究は極めて手薄であった。因みに「身分」という語句を標題に持つ研究書は二・三点を数えるのみである。とりわけ宋代以降を論じたものは仁井田陞氏の良賤制に関する制度史研究があるにすぎない。本論文はこうした研究の空白を埋めるという意図を持って執筆されたものである。

第一章は、宋元代の奴婢、雇傭人、佃僕・地客の法身分とその階級的性格を論じたものである。これまでの研究では史料上の「奴婢」や「佃僕」等の用語に引きずられ、それぞれの身分的性格を曖昧にしたまま階級的性格が論じられてきた。すなわち、史料に「奴婢」とあればそれは奴婢身分のものであり、階級的には奴隸であるとの認定がなされる一方、「奴婢」とは人の指示に従って労役に服す者という意味にすぎないとの反論がなされてきた。本章ではまず、宋代の良賤制に検討を加え、漢代以来の良賤制は宋代に到って消滅し、賤民としては官奴婢が存在したにすぎないこと、しかも官奴婢は官衙に繫属されて民間には流出していなかったことを確認した。法身分としての奴婢とは反逆縁坐（謀反・大逆の罪を犯した者の親族）と俘虜を原因として発生し、それ以外の人身売買等を原因としては奴婢の身分は発生しない。これが法理であった。それゆえ当時において、史料上に「奴婢」等の賤称をもって表記される者は法身分としての奴婢ではなく、「奴婢」とは奴婢的境遇下に置かれて服役労働に従事する者に対する社会的な称呼にすぎなかった。次に宋代には新たに所謂雇傭人法が成立したが、この雇傭人法の対象となったのは、日雇いや月決め等の短期間の雇傭労働者ではなく、主家に長期間隷属して労働を行う服役労働者であり、史料上の「奴婢」や「奴僕」とは多く雇傭人法の対象となる存在であった。彼らの中にはまれに人身の賃貸借という形式を通じて労働する者が見られたが、圧倒的部分は事実上の人身売買や債務への充当、さらには人身の質入れによって服役労働者となった者であり、多くは家内奴隸的性格を有していた。さらに、宋代史料には「佃僕」・「地客」と呼ばれる小作農が出現するが、これらは史料上一般に小作農を指称する佃客・佃戸とどう異なるのかを検討した。その結果、佃僕・地客とは経済的には地主の土地を小作する小作農という点で佃客・佃戸と同一の性格を示すものの、法身分としては雇傭人法が適用される存在であり、それは彼らが本来人身の売買や質入れを通じて田主に人身が保有され、人身に対する債務を負う存在であったからにほかならなかった。雇傭人身分の者のある者は家内労働や地主直営地の労働に従事し、ある者は主家によって自立せしめられ小作農＝佃僕・地客となっていたのである。それゆえ、宋代の小作農は、身分法の観点からすれば、地主に対して社会的に「主佃の分」があるとされ法的には佃客法の対象となる佃客・佃戸と、社会的に「主僕の分」があるとされ雇傭人法の対象となる佃僕・地客とによって構成されていたのである。

第二章は、宋元代の小作人である「佃客」（また「佃戸」）の身分を論じたものである。宋元代の佃戸制をめぐる問題は戦後の社会経済史研究の中心的な論争点の一つであった。見解の対立はその一端を示せば、一方が、宋代の佃客は経済的に地主に隷属し、それゆえ「主僕の分」あるものとして社会的法的に隷属的地位に置かれていたと主張したのに対して、他方は、地主と佃客の関係は経済的関係であり、佃客に対する刑法上の差別は佃客の抗租（小作料不払い闘争）に対する反動立法であると主張するものであった。本章ではまず、地主と佃客との刑法上の差別規定が北宋から南宋へ、さらに元代へとどう変化したかを検討し、従来の研究とは異なった変化を見いだした。すなわち、北宋から南宋へと地主の佃客毆殺罪は一般人に比べて一等から二等へと軽減の幅が拡大したが、逆に佃客の地主に対する犯罪は、北宋代に一等を加えるという規定以降、南宋代には姦淫罪に関して二等を加えるという規定が見えるだけであり、また元代に到って地主の地位は一層上昇し佃客の地位は一層地位低下したという主張には史料解釈の誤りがあり、主佃の法的格差が時代とともに拡大したという理解には根拠がないことを明らかにした。このことは佃客の地主に対する法的従属は、佃客の抗租に対する弾圧をねらった反動立法であるという見解を否定するものとなる。佃客に対する威嚇的効果を持ったた

う佃客への刑罰の加重が認められないからである。また本章では単に刑法上の差別規定の変化のみならず、そうした差別規定が何に基づいて形成されたのかという問題を設定し、この差別規定の形成には地主と佃客との間に「恩義」が存在するという時人の観念が基礎にあったことを示唆しておいた（この点は次章で詳述される）。次に、仁井田陞氏はかつて中国史における佃客の社会的な身分的地位の変化を論じて、宋代における「主僕之分」から明代における「長幼の序」へという身分上昇の図式を提起したのであったが、本章では第一章の論点を敷衍しつつ佃僕と佃客の社会的・人格的な隷属性を論じ、同じく小作形態をとりながらも佃僕には「主僕之分」があるとされ、佃客には「主佃之分」があるとされており、この違いは隷属性の強弱のみならず前者には雇傭人法が適用され後者には佃客法が適用されるという違いに基づくこと、明代の「長幼の序」という身分差は「郷飲酒礼」における年齢秩序に「主佃之分」という身分差が加味されたものにすぎず、いかなる人間関係も「郷飲酒礼」の場にあつては「長幼の序」という形を取らざるをえないことから、地主と佃客の身分関係の変化を論じる材料としては不適當であることを論じた。さらに、宋代の佃客に移転の自由があつたか否かという論争点に関して、小作農の階層差に注目すべきこと、移転（居住地の変更）と退佃（小作関係の解消）を区別して論ずべきことに注意を喚起し、北宋代の浮客とは住居はおろか生産手段の一切を地主に依存する不安定な農業労働者であり、彼らは地主の同意の下ではじめて移転できたこと、「主佃之分」ある佃客には移転・退佃の自由があり、「主僕之分」ある佃僕・地客は人身に債務を負う存在であることから債務の清算なくしては移転・退佃の自由を持たなかったことを論じた。

第三章は、私的な社会関係に身分差を設ける観念的根拠を扱った。およそ君主と臣下、良民と賤民、官僚と庶民とは秦漢以降の中国史を貫く公的な社会関係の基軸をなすものであり、これらは国家の制度として公的に設定された身分差を表現している。一方、中国史とりわけ宋代以降の中国社会では、先に見たように雇傭人（明代以降は雇工人）や佃客の法身分が存在する。そこで本章では、雇主－雇傭人、地主－佃客といった私的な社会関係の中に法的な格差を設ける根拠は何か、という問題を考察した。史料の語るところを率直に見れば、中国史においては階級関係や経済関係が一義的に身分関係を規定していたのではなく、身分関係が経済関係を規定する場合もあれば、両者が全く関わりを持たない場合も少なくない。それならば、当時の中国人にとって私的な社会関係の中に法的社会的な格差を設定する根拠は何であつたのであろうか。この問題に対して本章が与えた答は「恩義」であつた。中国史においても最も基本的で普遍的な私的社会関係とされていたのは家族・親族の関係であつた。家族と親族の間には服制（喪に服す関係）と尊卑・長幼（世代と年齢の差）に応じて法的な格差（例えば同一犯罪に関する刑罰の加重と軽減）が設けられていたが、そうした格差をもたらす根拠は家族・親族における恩義の深浅であつた。親と子における恩義はもっとも深いものと考えられ、それゆえ子の親に対する犯罪は嚴罰をもって処せられる。親族関係が疎遠になれば恩義は次第に浅くなり、刑罰の格差も縮小する。この家族・親族における恩義の関係を中核的基礎として、その同心円上に宋代の雇傭人と佃客が配置され、明清代の奴婢と雇工人とが置かれていた。すなわち、宋代の雇傭人や佃客が刑法上從属的地位に置かれていたのは、彼らが雇主や地主から恩義を受けていると考えられていたからにほかならない。このことは逆に言えば、当時の中国社会においては、私的な社会関係を法的社会的な身分差と捉える論理として、恩義以外の基準を持たなかったということでもある。但し、恩義の存在が直ちに社会的法的な差別として結果するのではない。

そこには各王朝がいかなる支配理念を有していたかによって相違が生じてくる。例えば、唐や明は良民間の階層分化を阻止するという支配理念から、地主と佃客との間に法的格差を設けなかったが、宋は実態に即した秩序を構成するという理念の下に佃客法を成立せしめたのであった。

第四章は、第一に宋代に良賤制が消滅したという第一章の論点を再確認し、第二に従来賤民と見なされてきた雑人、雑戸、雑類と呼ばれる人々の身分的性格を再検討したものである。宋代の代表的な法制史料には良賤や主僕に関する法規定が認められず、また裁判の判決文などにも良賤・主僕に関わるものが存在しない。これは唐代や続く元・明・清代と比較すれば、宋代史料の際だった特色といつてよいものである。また時人の記述にも宋代には良賤制は消滅したとの証言が少なくない。宋代に良賤制が消滅したのは、唐宋の間に国家の支配理念の転換があったからである（これについては第六章で詳しく論じる）。次に雑人・雑類・雑戸とは士農工商以外の雑多な職業に従事する人々を意味し、彼らは社会的に賤視されていたが、先述のように宋代には良賤制が消滅していたがゆえに賤民ではなかった。良賤制の消滅は、賤業従事者の存在を社会の表面に浮かび上がらせ、彼らをあたかも賤民であるかのごとく時人に記述させたのであった。また雑戸とは、特に官妓を指して用いられる称呼であった。官妓は特別の戸籍＝妓籍に付籍されていたことから、そこから一般の戸籍に移すことを「出籍」や「従良」と称し、あたかも賤民から解放されるような印象を与えているが、それは唐朝以前の賤民解放とのアナロジーにすぎない。官妓の出自にはいくつかのルートがあったが、三人以上と姦淫罪を犯した婦人は身分刑として雑戸＝官妓にされることもあった。

第五章は、宋代の「士人」についてその身分的性格を論じたものである。士人とは本来儒学の教養を持つ知識人を意味したが、科举制と学校制度の整備に伴い、宋代とりわけ北宋末以降は、同じく知識人でありながら官僚身分をもつものは士大夫と呼ばれ、未だ官僚身分を持たない者は士人と呼ぶという区別が行われていた。これは以後明清時代へと継続してゆく区別である。本章では以上の確認を行った後、士人の刑法上、役法上の特権、社会的な地位について検討を加え、いずれの側面から見ても、士人は士大夫に次ぎ庶民の上に立つ存在であったことを論じた。北宋中期以降全国的に州県学が設置され、新法党政権下で三舍法が行われるに到って挙士の機関たる学校は次第に取士の機関へと変化していったが、それはやがて太学や州県学の生員が官僚に次ぐ身分を持つものとの意識を社会的に醸成し定着させる結果となった。一旦廃止されていた三舍法を復活した徽宗朝には生員に対する役法上の優免規定が集中的に規定され、例えば上舍上等生が官戸と同等の優免が与えられているのは、国家体制上における生員の身分的地位の高さを反映している。一時中断していた科举は宣和三年（1121）に復活するが、解試に合格した挙人は宋代を通じて差役が免除され、刑法上も官戸に次ぐ優免が与えられていた。宋代の挙人は科举の階梯からすれば通説のごとくに明制とは異なって一時的な資格にすぎなかったが、法的社会的には明制と同じく固定化した終身身分だったのである。以上のような生員や挙人は宋代に成立した社会的階層としての無官の読書人層の中核をなす存在であり、彼らは在野の読書人とともに士たることの自覚に基づき、現職官僚や退職・帰休の官僚と協力し郷里社会の当面する諸課題の解決に尽力していたが、他方では自らの身分的地位を利用して州県行政に関与し、郷民に重大な被害を与えてもいた。これは士人の郷里社会における身分的地位によってもたらされたメダルの両面のごとき正と負の側面である。

第六章は、唐宋変革期と呼ばれ、中国史の一大転換点であった唐から宋への社会変化を身分

制の視点から論じたものである。漢唐の良賤制がどのような意味を持っていたか、宋代に何故それが消滅したのか、消滅の結果宋代にはどのような事態が生じたのかといった点に関して、唐代の部曲・客女と宋代の人力・女子を素材に理論的に総括したのが本章である。唐代の部曲・客女（以下部曲で代表する）に関する研究はおびただしい量に達しているが、そのほとんどは、唐代社会に一定の構成的比重をもって部曲なるものないしは唐律上に部曲と表現される隷属的労働者が存在し、彼らの存在形態や彼らの取り結ぶ社会関係が一定程度実態に即した形で法律上に反映していたという前提に立つものであった。本章ではこうした思考方法を「帰納的反映論」と呼ぶ。本章の立場は「帰納的反映論」と対称すれば「演繹的設定論」とでも呼ぶべきもので、唐代の部曲の法身分は、現実に存在した私的隷属民の隷属性が法制上に反映したものではなく、唐王朝の支配理念のあり方から演繹的に設定され成立したと理解するものである。唐律による限り、部曲とは解放された私奴婢が依然として主人の下に留め置かれたときに与えられる身分呼称である。では一旦解放されながら主人の下に留め置かれるということが、なぜ部曲という賤民身分をもたらすのか。部曲とは、良民や奴婢と同じく国家によってその身分的地位が設定されたところの国家的身分であった。国家的身分とは、単に国家の法令によってその身分的地位が規定された身分を指すものではなく、国家の制度、法令、政策などを深奥で規定づけた支配理念に基づいて演繹的に設定された身分を意味する。部曲身分が国家的身分であるということは、現実に部曲が取り結ぶ社会関係や彼らの存在形態が法制上に反映して成立した身分ではないということ、あるいは個別的で具体的な主人と部曲との関係は部曲身分に何らの影響も及ぼさないということの意味する。ではなぜ一旦解放されながら主人の下に留め置かれたものは良民であってはならないのか。なぜ彼らに部曲という賤民の身分が与えられるのか。それは唐朝の支配理念が、皇帝と直接的関係にあるものが良民であり、良民を介して皇帝と間接的な関係にあるものは賤民であるという建前を持っていたからにほかならない。この理念の下では良民が良民を隷属させることは禁じられ、良民が合法的に隷属せしめることができるのは賤民に限られている。唐朝の政策基調もまた当然のことに良民を確保することにあった。官賤民が官銜を介して皇帝と間接的な位置に置かれているように、部曲もまた主人（良民）を介して皇帝と間接的な位置に置かれており、それゆえ部曲は一旦解放されても賤民身分を与えられているのである。宋代に到るとこうした唐朝的支配理念は完全に放棄された。宋代には良民を確保することではなく担税戸を確保すること、現実に存在する社会関係に適合的な身分秩序を構成するという方向へと支配理念が転換した。それゆえ良民の下に良民が隷属することに何の妨げもなくなり、その結果、良賤制はその意味を失い、代わって良民が良民を隷属せしむる形態である雇傭人（人力・女使）や佃客の存在が合法化されたのであった。宋代に部曲身分が消滅する本質的な理由もまたこの支配理念の転換にあったのである。

第七章は、明代の奴婢と義子孫・雇工人の身分的性格について論じたものである。宋代に消滅した良賤制は元代に復活し明代にも承継されたが、明代の良賤制は漢唐のそれとは大きく性格を異にしていた。また奴婢の保有に関しても厳しい制約が加えられていた。明朝がこうした奴婢制を何の目的で創設しどう維持しようとしたのか、また宋元以来の雇傭人法を承継いだ雇工人律とはどのようなものであったのか、その運用の実態はどうであったのかといった問題を検討したのが本章である。明代には庶民は奴婢を保有してはならないという法が設けられていた。その意味するところは、庶民が法身分としての奴婢を保有することを禁じたものではなく、そこには「奴婢」＝無期的な他人の労働力を庶民が保有することによって生じる庶民の

階層分化の進展を阻止しようという意図が込められていた。一方奴婢の保有主体としては功臣（公・侯・伯の爵位を持つ者）のみが予定されており、官僚層に関する規定は存在しなかった。したがって、明中期以降急激に進展した官僚層から庶民層に到る有期的・無期的な他人の労働力の保有という現実はどう対処するのか、それら隷属的な労働者をどう身分規定するかという課題を明朝は抱え込むことになったのであった。まず無期的な服役労働者＝史料上の「奴婢」について言えば、明朝は官僚層であれ庶民層であれ彼らが保有する労働者は法律上の奴婢としては扱わないという立場を一貫して保っていた。したがってこうした無期的な服役労働者は犯罪があれば雇工人として扱われていた。次に同じく無期的な服役労働者でありながら義子孫という法形式を持つ者については、弘治年間より恩義の軽重や犯罪の種類によって科刑に差を設けるという考え方が現れてくるが、多くの場合は雇工人として扱われていた。さらに明律の雇工人律が予定していたであろう所謂雇傭労働者の身分認定にはかなりの不統一と混乱とが見られた。その根本的な原因は雇工人律が現実の雇傭労働者に密着固定したものではなく、単なる法律上の概念、刑罰の軽重を示す尺度でしかなかったからである。それゆえ雇工人律の対象には無期的な服役労働者があり、義子孫が含まれ、長工があり、時には短工すら含まれる場合があったのである。雇工人律のこうした性格は、何をもって雇工人とするかという問題を絶えず提起することになる。そしてこの問題は清朝へと持ち越されたのであった。

第八章は、明末から清初にかけての一連の雇工人律と奴婢規定の変化を検討し、清代にはそれまでの千数百年にわたる伝統的な奴婢制とは異なる新たな奴婢規定が創設されたこと、雇工人とは何かという明代以来の問題に最終的な決着がつけられたことを論じたものである。また明末以降の奴婢・雇工人律の改修過程は、奴隷制の一定の解体過程あるいは身分的隷属性を持つ労働者の解放過程であったと評価されてきたものであるが、本章ではそうした評価を否定し、この改修過程は単なる技術的な変化に過ぎなかったこと、さらにこの改修過程は何らかの質的变化を伴うものでなかったことから、身分法の歴史から見れば再編過程と呼ぶのが適当であることも論じた。明末から清代にかけて律への条例の付加という形で雇工人規定の改修が行われた。すなわち、雇工人条例は萬曆一六年（1588）、乾隆二四年（1759）、乾隆三二年、乾隆五三年、嘉慶六年（1801）、宣統二年（1910）の六次に及んだが、わが国はもとより中国においても、この幾度かにわたる改修過程——とりわけ萬曆一六年条例から乾隆五三年条例まで——をめぐる研究は、この改修過程の中に歴史的発展、すなわち服役労働者の凡人（一般人）への身分的上昇を見い出そうとの意欲に貫かれてきたといつてよい。しかし本章における検討によれば、この過程は様々な原因によって構成された私的隷属民の法身分を、実態に即して整序し細分規定してゆく技術的な改修にすぎなかった。すなわち、明代に雇工人と義子孫という法形式で把握されていた私的隷属民の一部は、萬曆一六年の新題例における「財買の義男」に関する規定を経過点として、清代雍正五年（1727）には新たな奴婢身分として分離・再編され、その反面として義子孫と雇工人の中から奴婢的性格を帯びた部分が分離され、両者の法身分が対象とする範囲はより狭く限定されることとなった。こうした限定とともに、本来雇工人身分が相対的基準に基づいて帰納的に定立されたものであったことから、どのような基準の設定が雇傭労働者の実態に適合的であるかが模索され、その模索の過程が萬曆一六年以降の雇工人身分の改修として表現されたのであった。したがってそれは技術的改革の域を出ないものであり、雇傭労働者の身分解放をこの過程の中に見い出すことは極めて困難である。雍正五年に創設された新たな奴婢身分は、伝統的奴婢とは異なって相対的基準に基づいて帰納的に定められたも

のであった。すなわち、清朝は人身売買や債務に充当された者をいくつかの条件を付して新たな奴婢身分として編成したのであり、それゆえこの時期を奴隸制の解体や変質期と見なすことは現実の歴史過程と齟齬する。以上のような奴婢・雇工人身分の改修過程は、法的身分体系の質的变化を示すものではないことから、変質ないしは解体過程ではなく、再編過程と呼ぶのが相応しい。

付論は、これまで仁井田陞氏や重田徳氏によって解釈が試みられた清律の「奴婢毆家長」条に追加された乾隆五三年条例につき、筆者自身の解釈を示したものである。すなわち当該条例は清代における佃客の身分上昇を示す（仁井田）とか、短工が支配的な雇傭形態になったことを示す（重田）と解釈されてきたのであったが、先学の理解は条例の句読と読解に誤りがあり、そうした解釈は史料の根拠を持たないこと、本条例はあらゆる雇傭関係にある労働者を、「主僕の分」ある者は雇工人として、「主僕の分」なき者は凡人として扱うという、明末以来の雇工人身分改修の帰着点を示すものであることを論じた。

論文審査結果の要旨

本論文は、「はしがき」、本論八章、及び補論一篇とからなる。

「はしがき」では、本論文は、中国、宋から清までの各王朝における良賤制、及び、良民の階層分化によって生じた私的な社会関係、即ち身分差が、法制上どのように位置づけられていたのか、その実情と理由との解明を主要課題とすることを述べ、併せて本論八章の考察成果を極く簡略に概述する。

第一章「宋元代の奴婢・雇傭人・佃僕身分」は、宋元両王朝下、各種文献に見出される標記の諸階層につき、新制定の「雇傭人」法、並びに佃客法と関連づけつつ、その法的身分と階級性格を論究する。すなわち、まず、宋代の良賤制に検討を加え、漢唐以来のそれは宋代に至って消滅し、賤民としては反逆縁坐と俘虜を生因とする官奴婢が存在しただけであることを確認したうえで、所謂奴婢は、人身売買や債務・質入れに充当されて家内奴隸的境遇にあった雇傭人・佃僕・地客などと呼ばれる人々に対する賤称にほかならず、「雇傭人」法は彼らを対象としたことを明らかにする。ついで、彼らと佃客・佃戸との関連について克明の考察を加え、一様に小作農ではあるものの、来歴と実態を異にしたことに対応し、前者には「主僕の分」があると見なして「雇傭人」法が、後者には「主佃の分」に基づいて佃客法が適用されたとする。提示の諸論点は、身分と階級性格とを安易に等置してきた従来の方法と理解とに、抜本的な反省と修正を迫るものであり、本章は本論文の柱軸をなす。

第二章「宋元代の佃客身分」は、主要な社会構成員であった小作人のうち、地主と租佃契約を結んだ佃客の法的身分を論究する。地主－佃客間に設けられた刑法上の格差には、確かに南宋において加重が認められるが、しかし一部の犯罪に限られて程度も極く些少に止まり、逆に元朝では一般人相互間と同等に扱われた可能性が高いことを指摘し、時代展開に伴う格差拡大を主張する通説を厳しく斥ける。ついで、佃僕と対比しつつ緻密の論述を重ねて前章の結論に再確認を与え、また、学界懸案の「移転の自由」に関しても、人身に債務を負う「主僕の分」ある佃僕が債務の清算なしには許されなかったのに対して、「主佃の分」ある佃客の場合は自由であったと結論する。

第三章「中国史における恩と身分」では、前二章の考察を踏まえ、雇主－佃僕、地主－佃客という私的な社会関係に、王朝が法的身分差を設定した観念的根拠の解明を課題とする。すなわち、家族・親族間における軌を一にして、佃僕・佃客は主人・主家と恩義の関係にあると認識され、のみならず、恩義の深淺が量刑に際する判断基準であったことを論証し、家族・親族間を律する恩義関係が拡大・援用され、佃僕・佃客が、かかる恩義関係を中核的基礎とする同心円上に配置されていた身分的法理構造を抽出して、頭初課題の解答とする。そしてその上で、良民相互間の私的従属関係を否定し、それ故に良民間に法的格差を設けなかった唐及び明と対比させて、社会の実態に即応して秩序の構成を期した宋朝特有の支配理念と歴史的独自性を浮き彫りにしている。

第四章「宋代の雑人・雑戸の身分」は、従来、賤民と理解されてきた標記階層に再検討を試みる。雑多な職業に従事するこれら人々は社会的に賤視されてはいたが賤民などではなく、該時期における良賤制の消滅が四民以外の人々を賤業従事者として浮上させ、時人に賤民として記録させたにすぎないと、明晰に論定する。中でも、「雑戸」は官妓を指称していたことを明らかにし、その生因や解放手続き等に加える論述は、克明にして生彩に富む。

第五章「宋代の士人身分」は、視点を移し、北宋末－南宋期に成立した官僚身分を有たない「士人」層の法的身分の解明を試みる。北宋中期以降に推し進められた科举制の整備と学校制度の挙士機関から取士機関への転換が、挙人と生員とを主体とする「士人」層の形成をもたらし、と同時に彼らは、刑法と役法との上で特権を保証されて、官僚身分を有する士大夫について庶民の上に立つ身分階層として確定されていたことを明らかにし、あわせて彼ら士人層の地方政界並びに地域社会におけるプラスとマイナス両面にわたる諸活動を活写する。

第六章「唐宋間身分編成原理の転換」は、第四章までの実証研究の成果に基づき、中国史上の一大転換点、唐宋変革につき、身分制の視座から総括的な理論把握を試みる。すなわち、まず論者は、唐代良賤制を特色づける賤民「部曲」に対する規定の特異さ（「解放後も旧主人のもとにとどまる旧私奴婢」）に着目して、その意味するところを考究し、「皇帝と直接的な関係に位置するのが良民、良民を介して間接的な関係にあるのは賤民」とする唐王朝の支配理念なるものを抽出し、部曲身分は、かかる支配理念から演繹的に設定された国家身分にほかならないと論定する。ついで、対照的に宋は、担税戸確保の必要上、現実適合した秩序構成を支配理念としたことから、良民間相互の支配－隷属関係を許容したことが、部曲をはじめとする各種私賤民が、法身分上、消滅するに至った理由であると指摘した上で、唐代の部曲と対比して、宋以後の法律に示される雇傭（工）人は、「実際の私的支配隷属関係に即して帰納的に定立された身分」であるとの興味深い性格づけを与えている。唐律の明記にも拘らず、部曲の社会的存在を容易には確認できないという疑問に説得的な解答を与えた意義もさることながら、とりわけ、支配理念なる視点は斬新であり、唐宋変革期理解に特段の深化をもたらすとともに、新たな学的課題を数多く提起した、注目の一章である。

宋において否定された奴婢制は、元で復活し、明ついで清代に継承される。第七章「明代の奴婢・義子孫・雇工人」は、明朝奴婢制に関わる諸論点につき、主として王朝側の対応に視点を定めて考察する。当初、私奴婢の保有は、有爵の元勳だけに限られていたのが、中期以降、官僚、さらには有力庶民層の間にも義子、義孫等の名目で無期的労役に服する私的隷属民－事実上の私奴婢－の保有が一般化したこと、しかし明王朝はそれら隷属者を奴婢とは見なさず、宋代の「雇傭人」法を修訂した「雇工人」律をもって対処するものの、同律が雇傭労働者を対象

として制定されていただけに十全に対応することができず、種々の混乱を出来していたこと、その法制的解決は続く清代にもちこされたことを、豊富の実例をもって論述する。極度の錯雑さから未着手のままに残されてきた難題に、研究史上、初めて挑んだ労作の一章である。

第八章「明末清初期、奴婢・雇工人身分の再編と特質」は、前章を承け、明末清初期に繰り返えされた「雇工人」律と奴婢規定の改変を検討し、民間において保有が一般化した私的隷属民に対する王朝側の位置づけの模索過程を跡づけ、清朝雍正5年（1727）には、いくつかの条件を付しつつも、人身売買や質入れによる奴婢保有が公認されて、奴婢制の新たな再編成を見たこと、対応して、乾隆53年（1788）、雇工人とは「主僕に分」あるものと一義の規定を見るに至ったことを明らかにし、その上で、これら一連の改訂の史的意義に関しては、出身・実態とも多様な私的隷属民をその実際に即して整序し、細分規定して行く技術的次元の作業に止まることを指摘、強調し、奴婢の身分上昇＝奴隷制の解体過程と評価する定説の不当なることを力説する。なお、付論「乾隆五三年条例の解釈をめぐって」は、上記定説なるものは標記条例の誤読に基づくことを詳説する。

以上の如く、本論文は、論者独自の唐代良賤制理解を一方の基点に据えつつ、良民層内の分化が進展した宋王朝から清王朝までを対象に、多様な呼称をもって登場する諸階層それぞれにつき、その具体的内容と実態とを明らかにしつつも、あくまでも基本の視角は法身分の何如に見定めて、考究したものである。その考察は高度の実証性と緻密の論理性に貫かれており、引用の史料すべてに対して周到の日本語訳を付して論拠の明確化を期していることも貴重な工夫として一言しておく必要があろう。

もとより、論者自身も指摘し、あるいは示唆しているように、法身分の十全なる理解には、各時代、とりわけ支配層の身分観や身分意識の解明が不可欠となされるし、論者によって提示された「王朝の支配理念」についても形成の契機は何であったのか、奴婢制の元での復活と清朝での再編成には支配民族モンゴル族、ジュルチン族の影響、佃戸の移転の自由に関しても同じ佃戸層でも階層分化が見られる事実を想起すると一概に自由と断じ得るのか等々、さらに考察すべき大小さまざまな問題が山積しているが、しかしそれらは、論者の考察をまって初めて見えてきた新課題にはかならず、本論文は、研究史上、中国身分法史なる新分野を拓いた画期的業績と評しても決して過褒の辞とはなされまい。斯学の深化と発展に寄与するところ、多大なるものがある。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。